No.167

青少年赤十字指導情報

Junior Red Cross Information 2019

特集 1 支援事業 & スタディーツアー

青少年赤十字海外支援事業 2年目報告

ネパール スタディーツアー 実施報告

まもる いのち ひろめる ぼうさい

ぼうさい きけん はっけん!

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society

人間を救うのは、人間だ。

人道とは誠実さの表れである

福井市明新小学校校長
青少年赤十字全国指導者協議会
会長 澤田　佳久

「守真志満」この言葉は、私の勤務校の校長室に飾られている額の言葉です。「真を守れば志は満たされる」。つまり、「自分が誠実であれば心が満たされる」という意味です。

人道とは、まさに、この誠実な心の表れではないでしょうか。「困っている人を助ける」「人が苦しんでいたら手を差し伸べる」というように、真に人を助けたいという誠実さが行動となって表れ、それは決して見返りを求めるものではなく、人のために尽くすことで自分の心も満足することができるのです。

2018年は、自然災害が多発しました。4月の島根県西部地震、6月の大阪府北部地震、7月の西日本豪雨、9月の北海道胆振東部地震、そして、相次ぐ台風による被害等、今や災害はいつ、どこの地域でも起こり得る現象となっています。

私の住む福井県でも2018年2月に、37年ぶりに大雪が降り、福井市では147cmと、平年の6倍もの積雪量を記録しました。この大雪の影響で、除雪が追いつかず、市内の小中学校では最大5日間の休校を余儀なくされました。

そんな中、県内各地では様々な支援がなされました。1500台もの車が立ち往生した国道8号線では、近隣の住民たちが食料を提供したり、救護所を設けたりしました。本校でも、PTAの役員と教職員が手分けして学校付近の歩道や交差点等の除雪を行いました。中には親子で通学路や歩道の除雪などを行う姿が見られました。

2018年8月に山口県で行方不明になっていた2歳児を発見した男性の「スーパーボランティア」とはいかないまでも、「何か役に立ちたい」「助けたい」という気持ちがこのような活動につながったのです。

誠実な心を持ち、自分ができることから始めることが人道の第一歩なのです。そして、この誠実な心が一人でも多くの人に広がり、人道の輪が大きくなっていくことを願っています。

CONTENTS

Junior Red Cross Information 2019 No.167
【青少年赤十字指導情報】

TOP MESSAGE
「人道とは誠実さの表れである」
福井市明新小学校校長　青少年赤十字全国指導者協議会
会長　澤田佳久　1

特集①支援事業&スタディーツアー
ネパール スタディーツアー実施報告　3

特集①支援事業&スタディーツアー
青少年赤十字海外支援事業2年目報告　5

特集②JRC×地域
「体験型」イベントを主催し地域貢献！
島根県立平田高等学校JRC部　7

トレセン報告
日本赤十字社の父
佐野常民の生地ならではの熱気！　9

日本縦断活動紹介
各ブロックの取り組み×子どもたちに伝えたい言葉　11

SPECIAL INTERVIEW
気象予報士・防災士　千種ゆり子　15

活用報告 防災教育
幼稚園・保育所向け防災教材
「ぼうさいまちがいさがし　きけんはっけん！」
広がる！自らの命を守る教育　17

国際交流
平成30年度 青少年赤十字
国際交流集会“Tokyo 2018”開催！　19

青少年赤十字（JRC）とは　21

報告
青少年赤十字活動状況のアンケート結果報告
青少年赤十字メンバー／赤十字ユースボランティア　22

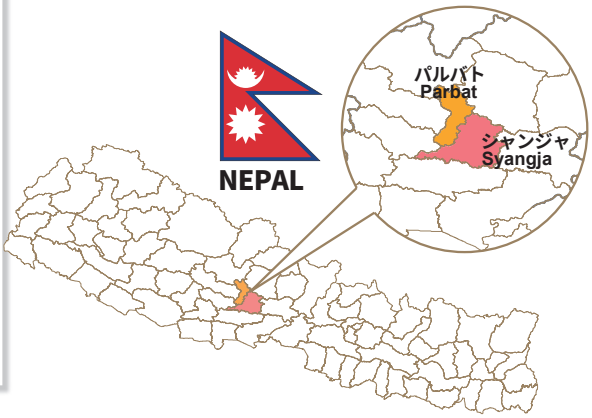
〈表紙協力〉JRC加盟校
島根県立平田高等学校
・ネパールの子どもたち

Junior Red Cross Information
2019.4.1 No.167
青少年赤十字指導情報
※本誌の内容は、原則として 2019 年 3 月 31 日時点のものです。

青少年赤十字海外支援事業

ネパール スタディーツアー 実施報告

青少年赤十字活動資金（通称「1円玉募金」）を活用した青少年赤十字海外支援事業に関連して（支援事業の現状はP.5を参照）、支援の対象国であるネパールにて、実際の募金の使われ方や募金によって改善した対象地域の衛生環境を現地で確認するために「青少年赤十字海外支援事業ネパールスタディーツアー」を実施しました。このスタディーツアーには、日本全国から選ばれた9名の高校生メンバーが参加。2名の先生、2名の職員と共にネパールに出発しました。



シャンジャ、パルバトの学校訪問での子ども達と笑顔の交流！

タイ・バンコクを経由して、標高1300mのネパール・カトマンズに到着。冬とは思えない日差しの強さや、道路が狭く信号がないことなど、空港からホテルまでの道中、メンバーたちは早速日本との違いを感じました。到着するなり、ネパール赤十字社からあたたかな歓迎を受けました。また、ネパール地震の復興支援事業を担当し今も現地で活動する日本赤十字社の職員から現在の活動を聞いたり、初日から多くの学びがありました。

今回のスタディーツアーのメインイベントは対象となる地域シャンジャ・パルバトでの学校訪問。日本の青少年赤十字メンバーが集めた1円玉募金が実際に使われ、事業が実施されている学校で支援の現状を確認し、子どもたちと交流を深めます。

学校までの道のりはネパール第２の都市ポカラから車で２～3時間。舗装されていないでこぼこ道を進むと、学校の全校生徒をあげて歓迎してくれました。また、笑顔の子どもたちがダンスや歌で熱く歓迎してくれました！

学校では、子ども達が実際に衛生の知識を広めるために作った「衛生の知識を伝える劇」を観賞し、トイレや手洗い場を実際に見学。手の洗い方を示す絵が壁に書いてあることや石鹸で丁寧に手を洗う姿をみて、衛生に関する知識が広がっていることを実感しました。

また、学校の近くに点在するネパールの子ども達のお家を訪問しコーヒーの木の苗を植樹しました。コーヒーの樹木の傍には日本メンバーと現地の子どもたちの名前が刻まれた看板も設置。将来は、この木を育て販売し、収入を得ることで、事業終了後も学校だけでなくコミュニティでも衛生環境を保てるようにという願いがこめられているのです。

カトマンズ市内観光へ

「クマリの館」とは？

クマリの暮らす館（クマリの館）

カトマンズ市内のダルバール広場にある「クマリの館」。ここにはネパール王国の守護神の生まれ変わりといわれる少女が住んでいます。クマリの存在は国勢に影響するとまで言われ、ネパールの人々にとってはとても重要な存在なのです。

そんなクマリは年数回の祭り以外には外に出ることは無く、外出時は地に足をつけることが出来ません。そんなめったに会うことの出来ないクマリのお顔を見ることができた私たちはとても幸運でした。クマリの存在に選ばれ館に入る際は両親と離れることとなり学校へ通うことも出来ず神としての振る舞いを教育されます。また、クマリとしての役目を終えたあとも結婚や生活についても自立して生きていく事が難しい現状が待っているのです。

豆知識：クマリの選び方はとても独特。牛の切り落とした首が置いてある部屋で驚かずに泣かない（動じない）…などの試験をクリアした少女がクマリになる事が出来るのです。

福島県　**坂田　実紀**さん

クマリは普通の子供と同じように親元で暮らしたり、遊んだり学校へ通う事が出来ないという運命を背負うことになることを初めて知りました。クマリになる子はとても可愛そうだと思ってしまいますが、ネパールの伝統文化を守っていかないといけないので、とても難しい問題だと思います。

スタディーツアーを経験して…

青森県　秋田　流有さん

水や衛生面が大きく影響するネパールの食文化を特に学びたいと思っていました。

ネパールでは安全な水が常にあるとは限らず、料理には油を多く使って加熱して有害微生物などを殺滅していた印象がありました。この経験を活かし、世界でも健康状態を保ち栄養価の高い献立を提案できるような国際栄養学の知識のある栄養士になりたいです。

大阪府　的場　祥之介さん

私の将来の夢は、クリエイティブな発想を通じて現地の人々への、技術提供、教育、フェアトレードを実施しその国を根本的に改革させ、発展途上国を成熟国まで成長させられるような会社を創ることです。この夢のため、今回のツアーは大きな収穫になりました。

熊本県　根岸　咲さん

私は、小学生の頃から赤十字の助産師として途上国で活動する事が夢です。今回念願だったこの研修に参加出来ると分かった時は、大変嬉しく、今まで自分の挑戦したことが無い事にチャレンジ出来るという期待で胸がいっぱいでした。この研修で学んだことをしっかりと周りに広め伝えていく必要があると思っています。自分が出来ることを日々探し、募金活動やメディアを使った広報など、ネパールのことを広めながらこれからの青少年赤十字の活動に生かして行きたいと思います。

フリータイムでは、日本の折り紙を折ったり、好きな食べ物や得意な教科、将来の夢についても語り合ったメンバーたち。一人ひとりの心に残るすばらしい学校訪問となりました。

毎日のホームルーム（メンバーと先生で実施される会議）では、１日の振り返りと翌日の目標を確認。その日に出た反省は次の日に繋げながら「これから私たちにどんなことができるか？」を考えたメンバー。事業に関する部分でも、トイレの数が生徒数に対してまだ少ないのではないか、ゴミ箱をもっと設置したほうがいいのではないか、と改善点も見つけることが出来ました。

メンバーは学校の活動や研修などの機会を利用し、今回のスタディーツアーで学んだことをJRCメンバーに伝えていきます。また、事後研修で作成した自分の活動計画を少しずつ実行していくなどこれからの活躍が期待されます！！

私たちにこれからできることは何だろう？

神奈川県　常川　美羽さん

学校の子どもたちは、私よりも将来への考えが固まっていて、また、それに対する強い意志も感じました。私もがんばろう！

岡山県　小野　陽香さん

現地へ行かないとわからないことを学ぶことが出来て、とても貴重な体験が出来ました。この経験を生かして、ネパールについてもっと皆に知って貰えるように活動していきたいと思います！

兵庫県　廣瀬　未沙さん

学校では、まだトイレの数が少ないのかなと思いました。不衛生な状態をきれいにすることは出来ているなと感じたので、今度はそれを保つ方法を伝えられたらと思います！

山形県　岡田　柚佳さん

この一週間で一番使った言葉である「ナマステ」は、両手を合わせ、相手の目を見て使います。あいさつをしあう大切さや嬉しさに触れることができました。

青少年赤十字 海外支援事業2年目報告

「青少年赤十字海外支援事業」は、日本の青少年赤十字メンバーの奉仕精神を醸成して、対象国赤十字・赤新月社の青少年赤十字メンバーの健康・安全の確保を図り、国際理解・親善を促進することを目的としています。青少年赤十字活動資金（1円玉募金）が財源の一部として使用されているこの事業は、支援を受けた子どもたちが活動の中心になり主体的な担い手として貢献することが期待されます。支援対象国であるネパールとバヌアツから事業の進捗に関する報告が届きました。

■ネパールでの活動状況

ネパールでは、「持続可能な水と衛生プログラム」と題して、子どもたちが衛生的な行動を身につける知識と技術を得て、家庭やコミュニティに普及することを目指した支援を実施しています。

事業開始2年目の今年は、支援先のシャンジャとパルバトの郡の学校で、青少年赤十字メンバーを対象に、手洗いの重要性や簡易手洗い場の作り方などの研修トレーニングを41回実施し、1,063人の青少年赤十字メンバーが知識を身につけました。また、「正しい月経の知識を知って生活を変えよう」というスローガンのもと、月経衛生管理に関する授業が92回開催され、1,885人が知識を身につけました。

2018年10月に行われたモニタリングでは、子どもたちが衛生をテーマにした劇を作ったり、水を大切にする必要性を歌に乗せてダンスと共に披露したり、活動の中で子どもたちが自然と知識を会得でき

バヌアツ

バヌアツ共和国
人口：26.5万人
首都：ポートビラ

防災の知識を学ぶ子どもたち

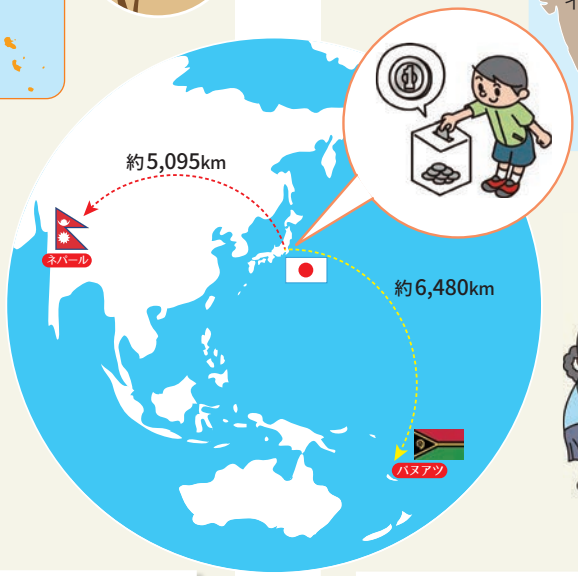
これから始まる防災教育を子ども達に伝えるバヌアツ赤十字職員

支援先の学校の先生とのミーティング

周辺地域校との合同避難訓練

ネパール

ネパール
人口：2,649万人
首都：カトマンズ



地域にも手洗い実践が普及している

月経用ナプキンを作成する子どもたち

簡易手洗い場で手を洗う子ども

劇で衛生について伝える子どもたち

るような工夫を見ることが出来ました。

また、子どもたちが学校内だけではなく、自分たちで地図を作りながら地域の家庭訪問も実施していることがわかりました。学校だけではなく家庭でも、台所で水はきれいに保管されているか、ゴミはゴミ箱に捨てられているか、など定期的に訪問して、チェックしています。

この事業をきっかけに、衛生に関する知識を得るだけではなく、それを伝えたり活動につなげたりすることで子どもたちのリーダーシップ醸成にもつながっていることが分かりました。

■バヌアツでの活動状況

オーストラリアの北東に位置し83の島で構成されるバヌアツは、人口24万人、面積は新潟県とほぼ同じ大きさです。地震や津波、火山噴火やサイクロン、洪水といった災害リスクに常にさらされており、2015年3月には巨大サイクロンで人口の70％が被害を受けました。そこでバヌアツ赤十字社では「学校における防災減災プログラム」と題して、公的に学校における災害リスクの軽減や防災の正しい知識を得る環境を整備することなどを目的とした支援を実施しています。

2018年7月に実施したモニタリングではまず、ポートビラのメラ小学校とシーサイド小学校を視察。年に3回の避難訓練を行い、防災教育として地域住民や生徒に対して津波に関する正しい知識を伝えており、教員側も積極的に学ぶ姿勢を示しているとこが分かりました。また、アンバエ島のロンブリタロ小学校でもサイクロン、地震や洪水、干ばつ等自然災害に対する備えについて学んでおり、防災減災プログラムが目標に向かって着実に進んでいることが分かりました。

海外だけではない！水と衛生問題

東日本大震災からヒントを得た災害時トイレ問題

目黒星美学園中学高等学校

目黒星美学園中学高等学校では防災への取り組みとして、被災地で使える「魔法の携帯トイレ」の普及活動を行なっています。女子生徒ならではの視点が生かされた活動について紹介します。

■女子生徒の視点から誕生

目黒星美学園は東京都世田谷区にある中高一貫のミッションスクール。同校は、毎年希望者を募り、東日本大震災の被災地である宮城県へボランティア研修を行っています。中学3年生のときに初めてこの研修に参加した生徒は、「被災地の方と話すのは初めてでした。石巻市の大川小学校に訪問し崩壊した校舎内でガイドの方から聞いた話は今でも忘れられません」と語ります。

研修から生まれた新たな取り組みの中で発案されたのが、「魔法の携帯トイレ」。災害発生時、家屋倒壊や断水などでトイレが使えなくなると、トイレの利用を減らすため、水分や食事を控える被災者が増加。結果として、脱水症状や慢性疾患が悪化してしまうという悪循環を引き起こしかねません。このように、生活に必要不可欠なトイレ問題。災害時のトイレを、「あったら良いもの」から「なくてはならないもの」への意識改革を行っています。

同校は女子校で、「魔法の携帯トイレ」はそんな女子生徒の視点から誕生しました。臭いの放出されない袋、中が見えない黒ポリ袋、液体をジェル状に固めるシートが１パックになっており、イラストの描かれた可愛らしいパッケージなど、抵抗なく持ち歩いてもらうための工夫が凝らされています。

この問題に取り組むようになったきっかけについて、生徒は「ボランティア研修で、宮城県の荒浜中学校で活動した先輩が、3月11日の卒業式の日、震災後にトイレが使えなくなり、壁に飾っていたペーパーフラワーを使ったということを耳にしました。この話を聞き、震災後の混乱した状況が伝わってきて、さらにトイレの必要性を広めるきっかけになりました」と話します。

■学校外に広がる社会還元のサイクル

また、同校の防災係である京百合子教諭は、携帯トイレについて「もともと災害時に学校で使うために材料を集めましたが、この活動がスタートしてから生徒たちが学内用としてだけでなく、より多くの人に使ってもらうための普及方法を考えるようになりました。そして、ここまで形になってきました」と話します。学校外で無料の作成体験を実施すると共に、ひとつの形として材料を大量購入し、障がい者施設の方々に封入作業を依頼、学園祭や保護者会などで販売して収益を寄付する―。こうして社会還元のサイクルを持つ活動へと発展させることができたのです。

この取り組みは国内に限ったものではありません。2018年にボランティア研修でフィリピンを訪問した生徒は「一番気になったのはやはりトイレのことで、バケツの水で流すという不衛生な環境に衝撃を受けました」。そうした経験も踏まえ、魔法の携帯トイレの認知度を高めるため様々な場所で発信していきたい、他人事でなく自分事として考えることが必要、と今後の活動について語る3人。これからの展開がますます楽しみです。

地域住民が災害時に役立つHow toを「体験」！ in 平田本町商店街

2018年10月、平田高校の最寄り駅「雲州平田」駅前の平田本町商店街を舞台にイベントが開催されました。

雲州平田まちあそび「人生ゲーム」は、平田本町商店街を舞台にした体験型の「人生ゲーム」。普通であれば机の上で遊びますが、体験型は新しい出会い、ふれあい、縁を大切にしながら商店街を回ります。

実はこのイベントに全面協力したのは平田高校。さらにJRC部も「災害が起きたら？」というブースを出展しました！

平田高校JRC部はこれまでの防災啓発活動の実績を活かし、ガレキから足を守る「新聞紙スリッパ」や即席で作れる「ふろしきリュック」、低体温症から身体を守る「タオルケットガウン」など、部員たちの指導で〝災害時に自らの命を守ることができる防災グッズ〟づくりを体験してもらいました。初めて「新聞紙スリッパ」を作った小学3年生の男の子は「簡単に作れました。家に帰ってお母さんにも教えてあげます」と嬉しそう。また、子どもの頃に阪神淡路大震災で被災した地元住民の女性は「災害が少ないこの地域に住む人々に防災の大切さを教えるいい試みだと思います」と話していました。

地域の皆さんにもっと防災について知ってほしい

「体験型」イベントを主催し地域貢献！

島根県立平田高等学校JRC部

青少年赤十字の態度目標「気づき、考え、実行する」を合言葉に地域に向けたさまざまな「体験型」防災イベントを主催する島根県立平田高等学校（以下、平田高校）JRC部の活動を紹介します。

「人生ゲーム」とは、株式会社タカラトミーから1968年に発売され、現在も親しまれているロングセラー盤ゲーム。

今回は、ゲームを飛び出し、コマに見立てた商店街を巡る「平田商店街体験版人生ゲーム」を開催！！

低体温症から身体を守り、手足も動かせる「タオルケットガウン」

体験型防災啓発活動を通して地域住民との交流が広がる

防災啓発の「体験型」ブースで活躍するJRC部員

体験型の防災イベントを自ら「主催」する
平田高校JRC部の取り組み

平田高校JRC部が防災啓発を『主催』するきっかけは6年前の東日本大震災。もし島根で災害が発生したら？高校生の自分たちに何ができるだろう？と考えた当時の部員が「なにもできないのは大変」ということに気づき、ただ単に伝えるのではなく高校生の私たちが伝えることが有効だと考え全校生徒へ伝えよう！から地域住民へ！と広がっていきました。

最近では、2018年8月に東京国際フォーラムで開催された公益財団法人 風に立つライオン基金主催『全国ボランティアアワード2018』で「第3位」入賞を果たし、世の中にあってほしいボランティアとして認められました。

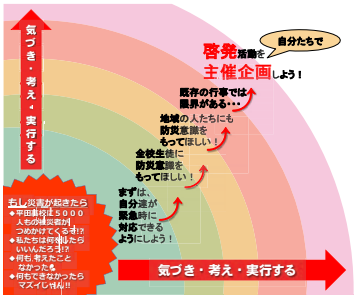
生徒たちは地震や台風などの災害が少ない平田周辺地域の人々の防災意識を少しでも高めようと、自分たちが『主催』する「体験」型の行事・イベントにこだわります。2017年には災害時対応の啓発イベント「熊本とつながる4・16」(会場・平田文化館)を地元有志のボランティアチームと共同主催。高校生による災害時対応イベントの主催、そして起震車(地震を体験する車)体験のイベントを企画し実施したのは、ともに県内でも先進的な取り組みです。

このイベントで活躍した今春卒業の3年生たちは「最初は既成の行事への参加から始めましたが、さまざまな経験を通して改善点に〝気づき〟、そのためにどうしたらよいかを〝考え〟、改善しながら次へ活かす〝実行する〟というサイクルができてきました。またボランティアでは相手が何を望んでいるかを知ることが大切だと気づかされました」と活動をふり返ります。

現在平田高校JRC部の取り組みは、地域からの評判で、メディアからも注目され、全国的にも高く評価されるようになっています。

現在JRC部長を務める名原朋花さん(2年生)は「先輩たちの実績を受け継ぎつつ、今後はインターネットを利用した防災の「体験型」の情報発信など新しいことにも挑戦していきたいです」と今後の抱負を語ってくれました。

今や、地域のみならず、県内のボランティア団体やコミュニティーセンターから「一緒に活動してほしい、企画を考えてほしい」と声が多く、今後も多くの人の命を守る活動が広がっていくことが期待されます。



災害への備えに関するイベントを自ら主催するに至った活動の広がり

顧問メッセージ

平田高校JRC部顧問　**片岡 初美**先生

生徒たちが自主的にやりたいと思うことにすべて任せています。私たち教員はあくまでもバックアップ役として「気づき、考え、実行する」生徒たちを見守り、一緒に防災や地域貢献について応援していきたいと思っています。

とっても簡単！ 作ってみよう！ タオルケットや毛布を使ったガウン

体温保持はもちろん、手足が自由に動かせるので**機能性**バッチリ!!

①着物を着付ける要領で、下半身を包み、紐等で止める。

②上半身を覆い、襟元と袖口を整える。

仕上がり(後ろ姿)

出典：日本赤十字社
災害時高齢者生活支援講習ハンドブック
平成29年5月発行

ガレキの上を新聞スリッパの有無で歩き比べ

県内初！高校生が呼んだ起震車で「体験型」防災啓発

全国ボランティアアワード2018で入賞したチーム
来場者2万人にも大好評だった「体験型」イベント

ワークショップ

佐賀の中学トレセンの特徴はなんといってもワークショップ。学校で行うJRC活動を事前にまとめ発表。今後、実践してみたい活動を計画し立案をする時間はトレセンの集大成です。

ワークショップ中の生徒に聞きました

これからどんな活動をしていくのかな？

国際理解・親善

発表したこと

普段は、地域清掃やベルマーク、アルミ缶集め、部活動別挨拶運動を行っています。

今後の活動計画

不要となった文房具を回収して途上国に寄付する他校の活動に興味を持ちました。これから、具体的に取り組むために必要なことを直接聞き、全校生徒に呼びかけたいです。

中尾 幸太 さん　砥上 愛子 さん

多久市立東原庠舎中央校・2学年

佐賀ならではの活動

発表したこと

毎年4月末に開催される有田の一大イベント「陶器市」でのボランティアをしました。

今後の活動計画

来年はもっと多くの生徒が参加して、地域の方や観光客と交流しながらゴミの片付けなどを行っていきたいです。

森 穂乃佳 さん

有田町立有田中学校・2学年

健康・安全

発表したこと

私たちの学校で発足した「雰囲気向上委員会」が呼びかけ、100人以上のJRCメンバーを集めました。そこでは学校からいじめをなくすための「SAGAいじめ撲滅会議」について討議しています。

今後の活動計画

これからも更に広く呼びかけ、生徒の視点からイジメをなくすための方策を話し合っていきたいです。

中村 百花 さん　中村 仁香 さん　小島 凛子 さん

佐賀大学教育学部附属中学校・2学年

「ごましお精神」とは？

佐賀トレセンでは「ごましお精神」という言葉がよく使われます。これは「ゴマはゴマだけではうまくない。塩は塩だけでは塩辛い。でもゴマと塩が合わさった“ごましお”は美味しい」というフレーズから、いつどんな時でも男子と女子が合同で行動することが集団の力を発揮できることを指しています。

キャンドルサービス

ホームルーム連絡会議

13：00 ワークショップ
19：30 ホームルーム
21：30 キャンドルサービス
22：20 就寝
3日目
6：30 起床
8：30 VS活動
9：20 学習④「国際理解・親善」
13：00 全体会・閉会式

Voice〈VSメンバー〉

佐賀県青年赤十字奉仕団
執行 亜由美 さん

高1の時に初めてトレセンに参加、高2からは毎年VSメンバーとして参加しています。また、学生時代の積極的なJRC活動を評価していただき、高2のときに青少年赤十字メンバーとしてベトナムへ派遣されました。今回、「国際理解・親善」のプログラム内で自らの体験を話す機会をいただき、熱心に聞いてくれる参加者の姿を目の当たりにしてうれしく思いました。生徒の皆さんにはぜひリーダーシップを発揮し、生徒会などで頑張ってほしいです。

トレセンの良さを広めていきたい Voice〈指導者〉

多久市立東原庠舎東部校
教諭　**轟木 信秀** さん

2泊3日のトレセン体験は、ただ楽しかった、感動した、で終わるものではなく、子どもたちの学校生活やその後の人生に大きく、良い影響を与えていると思います。成長した子どもたちの顔を見るのが私の何よりの喜び。
「気づき」「考え」「実行する」という青少年赤十字の態度目標をベースにしたプログラムで、生徒たちが得難い学びを体験してもらえるよう心がけています。

ひと夏の経験に終わらない学び Voice〈指導者〉

センターチーフ
伊万里市立山代中学校
教諭　**福島 裕一** さん

約20年前、初めてトレセンに参加した時、目に見えて成長する子どもたちの姿に衝撃を覚えました。それ以来、私自身も子どもたちと一緒に学ぶ貴重な機会として、可能な限りトレセンに参加しています。
佐賀ならではのトレセンへの熱心さを次の世代につないでいくため、これからも積極的に若い先生方を中心にトレセン参加を勧めていくつもりです。

（所属：佐賀女子高校衛生看護科4年）

トレセン報告

＼ 日本赤十字社の父 ／

佐野常民の生地ならではの熱気！

「リーダーシップ・トレーニング・センター（トレセン）」は、児童・生徒が集団生活の中で“誰もがリーダーである”というリーダーとしてのあり方を学ぶ研修プログラムです。今回訪れたのは日本赤十字社の創立者佐野常民の出身地であり、青少年赤十字（JRC）活動が活発な佐賀県。今後生徒会で活躍したい、と考える志の高い生徒たちの活動をご紹介します。

佐賀トレセン・中学生の部は、2018年8月8日（水）～10（金）に、「佐賀県北山少年自然の家」で開催されました。佐賀の中学トレセンは参加者が多いことが特徴の1つ。今年は県内29の学校から86名の中学生が参加しました。

トレセン タイムテーブル

初日	10：00	11：00	14：00	16：00	19：30	22：00	2日目	6：30	7：00	9：00
	開会式	学習①「リーダーとは」	学習②「赤十字概論」「青少年赤十字概論」	学習③「健康・安全」	ホームルーム	就寝		起床	朝の集い	フィールドワーク

Voice（参加生徒）

佐賀県立香楠中学校・2学年
篠原 美賢 さん

トレセン初日、希望してホームルーム連絡会の司会を務めたことが大きな自信になりました。
トレセンに参加する前の私は、自分で仕事を抱え込んでしまうタイプでしたが、フィールドワークやVS活動※を通して、グループのメンバーで仕事を分担することの大切さを学ぶことができました。また、今回学んだ「ごましお精神」を自分の学校でも広めていきたいと思っています。

Voice（参加生徒）

吉野ヶ里町立三田川中学校・2学年
盛岡 勇巳 さん

生徒会長をめざしている私はリーダーシップを鍛えるために今回の参加を決めました。
多くの仲間と力を合わせ活動し、身につけたリーダーシップと周囲の仲間と協力する力を今後の生徒会活動に活かしたいと思います。
各グループの代表者が集まるホームルーム連絡会議では自主的に手を上げ司会を務め、やりとげたことはとても良い経験になりました。

Voice（VSメンバー）

佐賀県青年赤十字奉仕団/佐賀県赤十字看護奉仕団
看護師　高津 結 さん

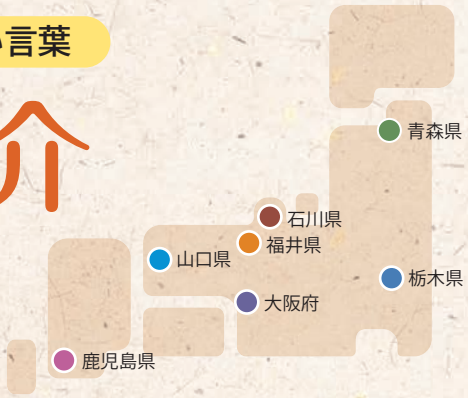
高校生の時、所属していたボランティア部の先生に誘われ、トレセンに初めて参加しました。初対面の人たちと生活を共にして仲良くなっていく楽しさを味わいました。同時に、青少年赤十字への関心が芽生え、世界で活躍する日赤の活動への共感も覚えました。
今は新人看護師として忙しい日々を送っていますが、これからも可能な限りVSメンバーとして協力していきたいです。

（所属：国立病院機構佐賀病院）

※VS活動：ボランタリー・サービスのこと。多くの人が集団生活するとき、よりよく過ごせるように困ったことを解決するため、自分から進んで行動すること。
※VSメンバー（運営補助）とはトレセンをよりよく過ごせるよう、ボランタリー・サービスのメンバーとしてサポートする社会人や学生のこと。

各ブロックの取り組み × 子どもたちに伝えたい言葉

日本縦断活動紹介



全国のJRC加盟校の中から、最新の取り組みをご紹介します。
JRCを積極的に活用し、児童・生徒の温かな心を育んでいる活動をヒントに、
日ごろのJRC活動や学校生活をますます充実させてください！

みどりのかぜエデュカーレ

AOMORI 青森県

（社会福祉法人 みつは会）

いのちをまもるぼうさい イメージソング「愛をつないで」の誕生

田頭 初美 理事長

平成26年度からの2年間、日本赤十字社より幼児教育施設として全国初の「防災教育モデル事業」の指定を頂きました。

これまでの子ども赤十字活動の中から防災をクローズアップし、園を挙げて取り組む機会を頂けたことは、園にとっても子どもたちにとっても非常に貴重な経験でした。

2年間の活動を通して一番感じたことは、未曾有の被害をもたらした東日本大震災などを身近に体験し、防災の意識を高め、自らが自分の命を守る心構えを持つことはもちろんですが、当たり前の日常がどれだけ幸せなことか、家族が一緒にいられること、住む家があることがどんなにありがたいことかなどを、身近な大人である我々が改めて感謝するとともに、子どもたちにも今ここに命あることの喜びや、自分の存在を大切に思う人がいてくれることの幸せを感じてほしいと思ったことでした。

そのような折に、当時「防災教育モデル事業」にあたってご指導くださった、県支部青少年赤十字指導講師の笹垣昇先生より、子どもたちに防災の意識を分かりやすく伝えていく手段として歌がいいのではないか、というアイディアをいただき、県支部のご理解ご協力のもと、県支部の青少年赤十字活動の一環として実現するに至りました。

昨年9月12日に開催された「日本赤十字社青森県支部創立130周年記念 青森県赤十字大会」では、多くの皆様に“いのちをまもるぼうさいイメージソング「愛をつないで」”をお聞きいただく機会をいただきましたことを心から感謝申し上げます。

今後とも、赤十字活動を通して様々な学びを得、明日を担う子どもたちの奉仕と博愛の心の教育のために邁進して参りたいと考えております。

♪「優しさと温かさでいっぱいのこの地球(ほし)にしたいから…愛をつないで生きてゆこう。」♪

子どもたちに伝えたい言葉

「善い事柄や善いものは後世まで継がれていく」

作詞者も作曲家も不明ながら、時代を経て今もなお歌い継がれている歌があります。それは皆さんご存知の「さくらさくら」という曲です。

シンガーソングライターの松任谷由美さんは、遠い未来にも皆さんの心に残るような歌を作り続けていたいと語っています。素晴らしいことですね。

いのちをまもる
ぼうさいイメージソング
「愛をつないで」

系列園の保育教諭が描いた絵によるコンペを行い、関係者のなかで選ばれた絵を採用しました。やはり、園の先生方はとっても絵が上手！

いのちをまもる ぼうさいイメージソング
「愛をつないで」

お試し版が視聴できます。
誰もが口ずさめるメロディーになっていますので是非お聞きください。

TOCHIGI 栃木県

栃木県立宇都宮高等学校

男子校JRC部員 試験最終日に福祉施設を訪問

村山 二郎 校長

宇都宮高校(略称：宇高)は、今年度で140周年を迎える伝統校で、全人教育を教育方針に掲げる男子のみの進学校です。JRC部の活動もオール男子の持ち味を生かして行動的で活発です。特に他校との交流には力を入れています。日赤栃木県支部主催のリーダーシップトレーニングセンター、県高等学校連絡協議会主催の各種大会、市内の清掃活動(クリーンウォーク)、近県JRCメンバーとの交流等には必ず参加する常連です。学校行事においても、地域との交流に積極的に取り組んでいます。まず、各定期試験の最終日には、JRC部員と一般生徒が福祉施設を訪問して、高齢者や乳幼児とのふれあいを楽しんでいます。長年実施している県立聾学校との交流会には、主にJRC部員と生徒会役員が参加します。この行事では、事前の「手話・指文字講習会」で、聾学校の先生から手話の基本を習います。当日は、苦労しながらも覚え立ての手話で挨拶をしたり、グループ活動では手話での会話を交わしたりして交流を深めます。これからも宇高のメンバーは、JRCの態度目標「気づき、考え、実行する」を一人一人が各分野で実践し、本校の生徒指標「和敬信愛」の精神を大切にしながら「自律自治」の醸成を目指していきます。

子どもたちに伝えたい言葉

「ボランティアとは志願すること」

ボランティアの原義は志願者のことだそうです。強制的に集められているわけではありません。つまり、自分の意志で自発的に参加することがボランティアの語源です。当然、JRC活動に参加する場合もしかりだと思います。

TOPICS

FUKUI 福井県

戦前の青少年赤十字旗を発見！

近藤 信一郎 氏
福井県青少年赤十字賛助奉仕団前委員長

今から50年以上前の昭和43年4月新採用教員として、福井市高須城小学校(現在は休校中)に赴任しました。備品関係の調査をしていて、別棟の倉庫でこの旗を発見しました。当時、青少年赤十字担当であり、青年赤十字奉仕団の活動をしていた事もあり、赤十字活動に生かす事を考え、校長の了解を得て預かりました。福井県支部が、創立130年を記念して、さまざまな資料提供を呼びかけている事を知り支部に寄贈しました。旗は縦70cm×横90cmで中央に赤十字マーク、周りに植物がデザインされ、横書きの文字　日本赤十字社・少年赤十字団も右から書かれていて、戦前の青少年赤十字旗と考えられます。福井県の赤十字関係団体の活動は非常に活発であり、貴重な記念品として、青少年赤十字をはじめすべての赤十字活動の発展に寄与できればと考えています。

子どもたちに伝えたい言葉

「死と苦痛に対して戦う」

身近なところから国際社会まで、内向きの考え方や発言がいっぱいです。これからの日本や世界の未来はどうなっていくのでしょうか。

「死と苦痛に対して戦う」赤十字がその解決策となり得るのではないでしょうか。その根幹にあるのが、赤十字の成立に関わった「ソルフェリーノの思い出」と「赤十字の諸原則」です。

小学生には少し難解ですが、中学生以上の人はぜひ読みましょう。また児童生徒の指導に当たっている先生方にもぜひ読んで頂きたい。またこれらの出版物が増えることも期待します。

宝達志水町立宝達中学校

ISHIKAWA 石川県

一歩出る募金活動

守田 敬三 教諭

毎年、秋は募金活動です。宝達中学校JRC委員会は、ここ二年の活動で募金額を増加することに成功しました。とはいっても、生徒の募金額が増えたわけではありません。行き先を増やしただけなのです。

学校での呼びかけはこれまで通り。それに加え、地元のスーパーにお願いして、店頭で募金活動をさせてもらいます。今年は、3店で活動しました。大、中、小のスーパーです。

地方のスーパーに訪れるお客さんは、ほとんど地元の方々です。子どもたちの知り合いもいます。だからといって、自動的にうまくいくわけはありません。

活動の始めは必ず、不安と気恥ずかしさがあります。しかし、勇気を出して、歩み寄ります。大事にしているのは、「大声」ではありません。自ら進んでお願いに行く「一歩」です。入口に来られた方に2人が進んで、「募金のご協力をお願いします。」と言います。頂けるならばもちろん「ありがとうございます」。もし、通り過ぎられても、お礼を言います。「またお願いします」でもよいです。大人数でなく、数人でやります。その方がいいと考えています。地元のお客さんと自然にふれ合う姿に近いからです。

不思議なことがわかりました。同じ活動時間なのに、大中小のスーパーの募金額が一緒なのです。小さなスーパーほどお客さんが少なくなりますが、逆に、募金に応じて下さる方たちの割合が高くなります。中には、大きな額をくださる方もいます。子どもたちも、びっくりします。

現在、宝達中には委員会が12あります。JRC委員会はいつも、半数近くが経験者です。

リピート率が高いのは、募金活動がよい思い出になるからでしょう。子どもたちは、お金と一緒に、喜びも頂いています。

子どもたちに伝えたい言葉

「捨身飼虎（しゃしんしこ）」

法隆寺の国宝、玉虫厨子（たまむしのずし）に描かれている絵を、聖徳太子も眺めていたに違いありません。びっくりするお話の絵ではありますが、他の命を救う行為を尊いとする考えが、昔々から理想とされていたのだとわかります。

守口市立さつき学園

OSAKA 大阪府

「福祉」をテーマにした総合学習に取り組んで

竹田 誠司 教諭

本校は、創立３年目を迎える義務教育学校で、１年生から９年生(中学３年生)までの578人に加え、夜間中学も併設されており、16歳から86歳までの135人の方が在籍しています。

最初の頃は戸惑うこともありましたが、２年目からは、運動会も前・後期合同で行い、１年生から９年生までが縦割りの班で一緒に行動する「全校遠足」も始まりました。

そんな中で、昨年度、これまで４年生と７年生(中学１年生)が日赤から車いすや点字ブロックなどをお借りして、別々に取り組んでいた「福祉」をテーマにした総合学習を「どこかで一緒にできないか？」と考え、７年生が先に「車いす・アイマスク体験」を行って自分たちが危険だと思った場所や難しかった所を出し合いました。そして４年生が実習を行うときに、７年生が班ごとにそのポイントに立ち、アドバイスしながら補助するという取り組みを行ってみました。その結果、７年生は例年以上に真剣に問題意識を持って学習に取り組み、下級生に対する思いやりの気持ちも持つことができ、４年生も上級生に対するあこがれや感謝の気持ちを持つことができました。

また、今年度は「福祉学習」のまとめとして、実際に地域に暮らしている障害を持った方々に来ていただき、学習していく中で新たに出てきた疑問などを、４年生と７年生の合同班で質問するという取り組みを行い、地域との交流を図ることもできました。

来年度には５年生と８年生が合同で臨海学習にいくことも決まり、国際理解や平和学習の取り組みの一環として夜間学級との交流も行われるなど、他の学校に比べて色々なことに気づくことができる機会が身近にある環境の中で、みんなが「**ふ**だんの**く**らしを**し**あわせに」していってくれればと思っています。

子どもたちに伝えたい言葉

「あの青年は人のしあわせを願い、人の不幸を悲しむことのできる人だ。それがいちばん人間にとってだいじなことなんだからね」

この言葉は、結婚式前夜「のび太くんとうまくやっていけるか」不安になったしずかちゃんに向かって、しずかちゃんのお父さんがかけた言葉です。そして、タイムマシンで未来にやってきたドラえもんとのび太は、この言葉を聞いて思わず涙ぐむのです。

宇部商業高等学校

YAMAGUCHI 山口県

「気づく」は楽しい！「気づく」は広がる！

土田　葉子 教諭

昨年の秋、県支部の日赤フェスタで、パネルシアター「ももちゃんのけんけつ」が初めて一般の方を前に上演されました。ストーリーも絵も本校の完全オリジナルです。

実はこの作品が出来上がったのはそれより1年以上前。献血の大切さを子どもの頃から知ってもらえたら、年々減少している若年層の献血者の数も増えるのでは？という話が部活動で上がっていたのです。それがパネルシアター、という手法と結びついたのは、顧問の私が家庭科の教員だから、ということもありました。その当時も40人近い部員がいましたが、それを5つのグループに分けて、パネルシアターの台本のプレゼンをしようということになりました。その中で選ばれたのが「ももちゃんのけんけつ」だったのです。でもせっかく完成した「ももちゃんのけんけつ」も新入部員の前でだけ上演されるものでした。いつか、子どもたちの前で上演できたら、と考えながら、「折り紙で作るチッチ」も考案していました。その夢が実現したのが昨年のフェスタだったのです。今は「けんけつかるた」「けんけつメンコ」などを開発中です。初めてJRCの顧問となって6年目ですが、生徒さんと活動していると、底なしに"気づき"があるのが最大の喜びですね。

子どもたちに伝えたい言葉

「自分を好きになったら周りの人のことも好きになれた」

タレントの西原さつきさんの言葉です。西原さんは16歳でトランスジェンダーであることを自覚し後に性転換手術も受けました。「女性になる」というより「女性に戻す」という感覚だったそうです。そんな彼女のこの言葉は、どんな人にも大切なことの様に思えました。

鹿児島市立武小学校

KAGOSHIMA 鹿児島県

おじいちゃん・おばあちゃんたちの笑顔を見るために！

六笠　登由 校長
徳永　貴子 教諭

本校では、地域と一体になって「アルミ缶・プルタブを集めて車椅子を贈ろう」という活動を行っています。

毎朝、子どもたちは家庭からアルミ缶等を持って来て、玄関で活動しているJRC委員会の子どもに渡すと、持ってきた量に応じてVS（ボランタリーサービス）カードにスタンプをもらえるようになっており、子どもたちは楽しみながら活動しています。また、地域の方々も本校の子どもたちの取組を応援しようと、アルミ缶等を集めて学校に持って来てくださいます。このようにして集めたアルミ缶等を売却した収益金で車椅子を購入し、毎年2月のJRC集会で、市社会福祉協議会と地域の老人ホームに車椅子を1台ずつ寄贈しています。また、児童には、ボランティア賞の表彰も行っています。

本校では、困っている人を見ると、「手伝いましょうか」とか「何かすることはありませんか」という言葉が日常的に出てくる優しい子どもたちが育っています。

これからも、赤十字の理念である人道の精神をもち、社会に貢献しようとする子どもたちの育成をめざして、地域と一体となって取り組んでいきたいと思います。

子どもたちに伝えたい言葉

「今、自分にできること」

「車椅子に」とプルタブを持ってくる子ども。自身を知り「募金を」と財布に入っていた小銭を全部持ってくる子ども。自分にできることを考え、実行できる人は素晴らしいと思います。そんな人がもっともっと増えてほしいです。

東日本大震災をきっかけに会社を退職し、気象予報士の道へ。お天気キャスター・気象デスクとしてTVを中心に幅広く活躍中の千種ゆり子さん。現在のお仕事を選ばれた理由や防災への思いをうかがいました。

気象予報士・防災士

千種ゆり子

千種ゆり子　Chikusa Yuriko

1988年埼玉県出身。一橋大学法学部卒業後、一般企業に就職。2013年に気象予報士資格を取得し、TV番組のお天気キャスター、気象デスク、地球温暖化や防災に関する講演活動のほか、新聞コラム執筆なども手がけている。

私の原点となったのは「阪神淡路大震災」と「京都議定書」

神戸市東灘区に住んでいた小学校1年生の時、阪神淡路大震災で被災しました。学校でもトイレの水が流れなくなるなどの被害はありましたが、それほど大変だったという記憶はありません。後年になって両親に当時のことを聞いてみると、街が破壊された悲惨な光景を幼い娘に見せたくなかったので、できるだけ外出させないように心がけていたそう。ありがたい親心です。

でも心のどこかに被災の記憶は残り続けていたと思います…。

小学生時代には1997年に京都で開催された「地球温暖化防止京都会議」でCO2などの削減率を定めた「京都議定書」が大きな話題になりました。このニュースを聞いて地球温暖化問題への関心が芽生え、やがて自分なりに地球のために貢献できないかと思うようになりました。地球環境や自然への関心は中学、高校と続きました。私にとって人間がつくったモノより、自然の方がはるかに魅力的に思えたのです。

文系だったので大学は法学部を選んだのですが、考えてみると法律って「人間がつくったモノ」の最たるもの……。入学後にちょっと「しまった!」と思いました(笑)が、大学時代には、現在まで続けている空手と出会うことができましたし、地球温暖化問題とも関連するエネルギー関係の企業への就職を果たすこともできました。

お天気キャスターだけではない幅広い気象予報士の仕事

ところが就職1年目に待ち受けていたのが「東日本大震災」。当時、勤務していた企業もこの大災害によって業績に大きな打撃をうけました。社内に不安が広がる中、私は「会社に頼らず、自分が本当にやりたいことに取り組める実力を身につけよう」と考えるようになり、気象予報士の資格を取得するスクールに通い始めました。その時はまだ将来の明確なビジョンがあったわけではありません。自分がその世界で通用するかもわかりませんでしたから、会社の仕事は続けながら資格試験の勉強に取り組んでいました。

スクールに通っていると、気象予報士に関するさまざまな情報が集まります。テレビのお天気キャスターだけでなく、気象や防災、環境問題について講演活動や原稿執筆など、可能性が広がっていることに気づきました。地球温暖化や防災について自分なりの社会貢献がしたいと思っていた私にとって、挑戦しがいのある世界でした。

資格取得後、NHK青森のオーディションに合格し、会社を退職して青森に向かいました。なぜ青森かというと、それまで私は大雪の苦労というものを実感したことがありません。これから気象予報士として仕事していくために豪雪地域の方々の気持ちをも分かっておかなければと思ったからでした。雪国での生活と地方局での経験は、その後、東京のキー局での仕事を始めてからも大きな財産として役立っていると思います。

未来を担う子どもたちのために自分ができる仕事に挑戦していきたい

現在は土曜のニュース番組(テレビ朝日)にお天気キャスターとして出演しているほか、出演のない日は気象デスクとして情報収集や原稿チェックなど他の気象予報士のサポート業務に従事しています。

そのほか自分が通っていた気象予報士試験講座の講師や企業や自治体が主催する気象や防災に関する講演でお話をする機会もあり、日々、言葉で「伝える」ことの面白さと難しさを実感しています。

今回、日本赤十字社の防災教育プログラムで小・中・高校生向け「まもるいのち　ひろめるぼうさい」や幼稚園・保育所向けの「ぼうさいまちがいさがし　きけんはっけん!」を拝見して、防災に関する情報がわかりやすく体系的にまとまっていることに感心しました。随所に「伝える」工夫があり、私も子どもたちに防災のお話をする機会にぜひ使ってみたいです。

異常気象をもたらす地球温暖化問題はさらに深刻化することが予想されます。家族や大切な友だちを守るために、今後ますます防災知識の重要性が増してくるでしょう。私も未来を担う子どもたちにそうした知識を広めるお手伝いをしたいですし、防災教育を普及するための企画・制作にも関わりたいと思っています。

活用報告

幼稚園・保育所向け防災教材

「ぼうさいまちがいさがし　きけんはっけん！」広がる！自らの命を守る教育

災害時に自分の命をどう守るのか。防災教育の普及に務める日本赤十字社は、2018年8月、幼稚園・保育所向けの防災教材「ぼうさいまちがいさがし　きけんはっけん！」（以下、「きけんはっけん！」）を完成させ四千セットを製作。全国の青少年赤十字加盟園・保育所に配布しました。幼稚園・保育所だけでなく小学校低学年にも汎用性があると評判のこの教材。今回は、さまざまな現場での活用例をご紹介します。

■やっぱり使える！幼稚園・保育所での教材活用（武蔵野赤十字保育園）

「おはようございます！」。元気な声で迎えてくれたのは、武蔵野赤十字保育園の4歳児クラス21人の園児たち。防災関連の活動では毎月1回、避難訓練を行うなど積極的に取り組んでいます。

今回の講義はテーマ「地震」のシートを使い、地震が起きた際の行動について子どもたち自らが考え、発見していきました。担任の田村智子保育士が園児たちの興味を上手にひきつけながら日常で起こり得る災害について説明していきます。

説明が終わると4つの班に分かれ、教材のシートに描かれた危険な箇所や危ない行動をしている子どもたちについて次々と指摘していきます。

子どもたちは探したり、比べたりするのが楽しいようで、〝まずは描かれた絵に興味を持ってもらいたい〟という作り手の願いが現実のものになりました。

その後、気づいた点を一人ひとりが全体に向けて発表。お友達と話し合いながら、正しい行動が学べるとともに、危険な行動や間違った行動について、「なぜいけないのか」を皆が考えて学ぶことで、子どもたちにもしっかりと伝わっていく様子

武蔵野赤十字保育園

「みんな、この絵を見て！」「どこが危ないと思う？」といった保育士の呼びかけで、園児たちはどんどん絵の世界に引き込まれていきます。

子どもたちの意見はさまざま。大人が想定していたこととは違う答えがどんどん出てきますが、それも大事な発見のひとつ。

専門家の声

監修：防災＆情報研究所
代表　髙梨 成子氏

教材の監修者として2017年10月から開発チームに加わりました。幼いうちから自分の命の守り方を身に付けてほしいと考えながら、携わってきました。

この教材は、津波や地震、雪害などのテーマを取り上げています。園でこうした取組みを行うことで、防災についての知識を子どもから家族へ伝えるという方法もあると思います。「きけんはっけん！」はそうしたことが実現できる可能性のある教材です。

が印象的でした。

田村保育士は、「きけんはっけん！」がこれまでの教材と違う点について、「災害時の瞬間が描かれている点」だといいます。そして、身を守る行動を定着させるため、普段の生活の中でも指導していきたい」と語ってくださいました。

■もっと使える！小学校における応用事例

（いわき市立菊田小学校）

いわき市立菊田小学校2年3組の児童24名を対象に、「きけんはっけん！」を活用した防災授業が行われました。まずモニターを使って、2018年7月の豪雨災害や8月の北海道地震の災害の様子を学びました。災害の種類や被害など基本的なことが分かったところで、4つの班に分かれ、教材の絵を見て危ない場所や危険な行動をしている人を探していきました。

だいたいの意見が出尽くしたところで、担任の白石優先生が答え合わせをしました。この時、菊田小独自で工夫したことは、モニターに答えの絵の拡大画面を映し出すこと。絵をクローズアップすることで、解説ポイントが確実に伝わります。

授業の最後に、自らを守るための防災グッズを紹介。普段から災害に備えることについて家庭でも話しあってほしいという松本光司校長の説明で、45分の授業はあっという間に終了しました。

この教材の良い点について白石先生は、「まず絵が可愛い、そしてグループ活動に使いやすいよう工夫が凝らされている」と語ってくださいました。

幼稚園・保育所では楽しみながら防災を学ぶことができ、また、小学校では深い学びへとつなげることができる「きけんはっけん！」。今後もさまざまな教育現場での活用が広がりそうです。

いわき市立菊田小学校

「風が強い」「雨が降ってる」「雷雲があるね」「何番の子が危ない」。あちこちから意見が飛び交います。

小学生になると文章でも表現できるため、記入シートを用意しました。

東日本大震災の直後は避難所となった菊田小学校。2018年3月には、5年生と当時のボランティア経験者がご飯とレトルトカレー（500食分）の炊き出しをするなど、経験を次の世代につなげる活動も行っています。

いわき市立菊田小学校
松本 光司校長

指導者の声

今回、「きけんはっけん！」を授業で使うにあたり、答えの見せ方に工夫しました。また、児童が集中できるのは30分程度なので、時間配分に留意し、冒頭で災害について説明したり、最後に避難袋を紹介して子どもたちから保護者へ災害への備えについて話してもらうという狙いも加えました。小学校低学年の授業における活用はほかにもさまざま考えられます。例えば「まもるいのち ひろめるぼうさい」と組み合わせた活用方法もあるでしょう。そうした点からもこの教材は大変意味のあるものだと思います。

幼稚園・保育所向け防災教材

「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん！」

災害時の危険（場所・行動）について伝え、自分の身を守るための基礎的な知識や判断力を身に付けてもらうことを目指した教材です。

教材は日本赤十字社HPからダウンロードすることができます。

日赤 きけんはっけん！ で検索！

http://www.jrc.or.jp/activity/youth/prevention/

3つのテーマを通して社会における青少年赤十字メンバーの役割を考える

平成30年度青少年赤十字国際交流集会

“Tokyo 2018”開催！

2018年11月22～25日、東京・国立オリンピック記念青少年総合センターで「平成30年度青少年赤十字国際交流集会“Tokyo 2018”」を開催しました。
今回はアジア・大洋州20カ国から来た海外メンバー40名と日本全国から集まった高校生37名が参加し、指導スタッフ10名、ユースボランティア10名、語学奉仕団34名も運営に携わりました。

グループディスカッション

各テーマごとグループディスカッションを行うメンバー

ディスカッションテーマ「災害対応能力／防災」

テーマ 災害に対するコミュニティのレジリエンス（回復力）を強化するために青少年赤十字メンバーとしてどのように関わっていくか？

「災害前の防災から災害後の復興までのプロセスで何ができるかを話し合いました。同じ洪水という言葉でも国・地域によって受け止めるニュアンスが違いますが、メンバー全員が国や地域を越えて議論を交わし、深いディスカッションができました」（ファシリテーター：中井 正典 先生）

Vipanpreet Malhi さん（インド）

私が住むインド・パンジャブ州で大きな洪水被害を受けたことがありました。それをきっかけに防災への関心が深まり、今回の国際交流集会に参加しました。話し合いの中で、どのようにしたら災害時に命を助けられるかについての多くのヒントをもらい、また防災教育の重要性を再認識することができました。

中南 開晴 さん（三重県）

台風による豪雨被害で友人を亡くしました。悲しみの中で一人でも多くの生命を救うために何かできないかと思いつつ参加。語学奉仕団の方のサポートもあって海外メンバーとも意気投合でき、彼らの防災意識の高さに大きな刺激を受けました。将来は看護師として地域の災害対応活動に関わりたいです。

ディスカッションテーマ「高齢化社会」

テーマ 青少年赤十字メンバーとして各国や地域でどのように高齢者と関わっていくか、現在またこれからどのような活動が考えられるか？

「同じホームルームのメンバーの国で高齢化社会の状況は様々であり、そのためにどのような取り組みが行われているかを知ることは大切です。そうした海外の事例と自分の国・地域を比較することで今まで見えなかったことが見えてきました」（ファシリテーター：塚元 雅則 先生）

QuanYu Lu さん（中国）

中国でも高齢化が進んでいます。今回、日本の高齢化社会の状況や政策について知ることができたのが収穫でした。また同じホームルームのミャンマーやベトナムの状況も知ることができ、帰国したら赤十字の仲間とお年寄りが安全に暮らせる社会の実現を目指して活動していきたいと思っています。

伊藤 沙綾 さん（大分県）

私が住む大分県は日本でも高齢化率が高い県。私自身が高齢化社会の中で何ができるだろうと考えて参加しました。一言で高齢化と言っても国・地域によってさまざまな状況があることがわかり視野が広がりました。さまざまな国の人たちと英語でコミュニケーションできたのも良い経験でした。

「平成30年度青少年赤十字国際交流集会“Tokyo 2018”」は、アジア・大洋州地域の若者と日本の高校生の相互理解と親善を目的に開催されています。今回のテーマは「社会における青少年赤十字メンバーの役割を考える」。具体的には「高齢化社会」「災害対応能力／防災」「多文化共生」の3テーマについてのアクションプラン(行動計画)を考えていきました。

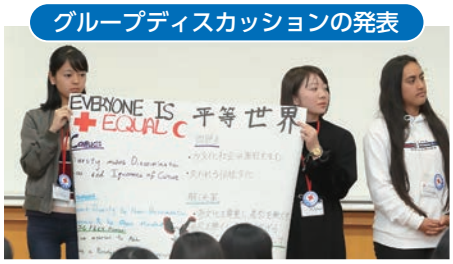
参加者は海外と日本のメンバーが混じった7～8人から成る10ホームルーム(グループ)に分かれます。3泊4日の日程の中にはトレセンのようなプログラムもあり、フィールドワークによってチームワークを養い、テーマについてのグループディスカッションを実施。最後に話し合いの成果を全員の前でプレゼンテーションしました。各ホームルームは高校教員の「ファシリテーター」、通訳などのお手伝いをする「語学奉仕団」、高校生と世代が近い「ユースボランティア」で構成されています。国境や年代、立場を越えた人々の“コラボレーション”が国際交流集会の大きな特色です。

最終日前日の11月24日(土)、各ホームルームのプレゼンテーション終了後、各国の民族衣装などをまとって、歌やダンスなどのパフォーマンスを披露する「文化交流」を開催。イベントの最後には全員がステージに上がって「We are The World」を合唱し、感動の一夜を締めくくりました。

文化交流

日本メンバー全員でソーラン節を披露

グループディスカッションの発表



3つのテーマで各グループごと話し合ったことを劇やパワーポイントで全体発表

From Staff「私たちも参加者でした」

語学奉仕団・コーディネーター
小髙 健太郎 さん

17年前の高校時代にこの集会に参加して、ボランティアの素晴らしさを知り、かけがえのない仲間を得ました。そんな自分の経験を生かして、日本各地と世界各国から来た若者たちが充実した経験ができるよう、今回コーディネーターとしてこの活動に携わっています。普段は会社員として仕事をしていますが、青少年赤十字の態度目標「気づき、考え、実行する」はビジネスにも通じるものがあると感じています。

ユースボランティア
村松 輝歩 さん

青少年赤十字活動は、中学生の時から行っています。国際交流集会では、日本の参加者は海外メンバーの意識の高さや英語によるコミュニケーションなどに最初は戸惑うこともあると思います。そんな時、2年前(2016)に参加した経験と参加者との年齢が近い自分の経験を踏まえてアドバイスするようにしています。一人でも多くの参加者が、将来、国際交流の輪を広げてくれるとうれしいです。私は、青少年赤十字活動を行っている時からお年寄りと関わることが好きで、現在、短期大学で医療・福祉の世界を目指しています。

ディスカッションテーマ 「多文化共生」

テーマ 赤十字は特定の人種、宗教、思想などに偏ることなく事業を進めていますが、その中で青少年赤十字メンバーとしてはどのように貢献できるか？
「お互いの“差”を認めて、排除や差別、対立をするのではなく、どのように共生していくかを考えてもらいました。ディスカッションを通して友情を育みながら、お互いの文化への理解を深めることができたと思います」
(ファシリテーター：従二 元 先生)

Dedar Saf さん
(アフガニスタン)

私は赤新月社のスタッフとしてアフガニスタンのために働きたいと考えています。今回の国際交流集会では、日本をはじめ多くの国の若者たちが何を考え、どのような行動をしているかを知ることができました。今回得た知見を祖国の人々を貧しさから救う活動に生かしたいと考えています。

仲宗根 りな さん
(沖縄県)

両親はペルーの日系移民だったこともあり、私自身、異文化理解への関心があったのでこのテーマを選びました。初めてお話しする国の人がほとんどで、毎日がとても刺激的。同時に私が生活している沖縄のことを世界の人々に知ってもらうチャンスでもあり、積極的にコミュニケーションしています。

〈青少年赤十字（JRC）とは〉

はじまり

子どもたちの「気づき」をきっかけに

第一次世界大戦のとき、カナダ、アメリカ、オーストラリア、イタリアの学校の生徒と先生は、戦争で苦しむヨーロッパの人々をなぐさめ励ますため、手紙やプレゼントなどを赤十字を通じて届けました。

これがきっかけとなり、青少年赤十字が誕生しました。

人道的な価値観を世界の子どもたちへ

赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できる人間に成長してほしいという願いから、赤十字社連盟（現在の国際赤十字・赤新月社連盟）は1922年に青少年赤十字を創設することを決めました。日本の青少年赤十字は、1922年に滋賀県の守山尋常高等小学校（現在の守山市立守山小学校）に誕生した「少年赤十字」から数えて90年以上の長い歴史をもっています。

青少年赤十字が大切にしていること

青少年赤十字の実践目標

- **健康・安全**
  生命と健康を大切にする
- **奉仕**
  人間として社会のため、人のために尽くす責任を自覚し、実行する
- **国際理解・親善**
  広く世界の青少年を知り、仲良く助け合う精神を養う

青少年赤十字の態度目標

- **気づき**
  身近な問題を発見する
- **考え**
  問題解決のための道筋や方法を探る
- **実行する**
  活動に取り組み、評価と反省を次へ活かす

青少年赤十字の導入・活用のメリット

赤十字を教材に、「生きる力」を育てる

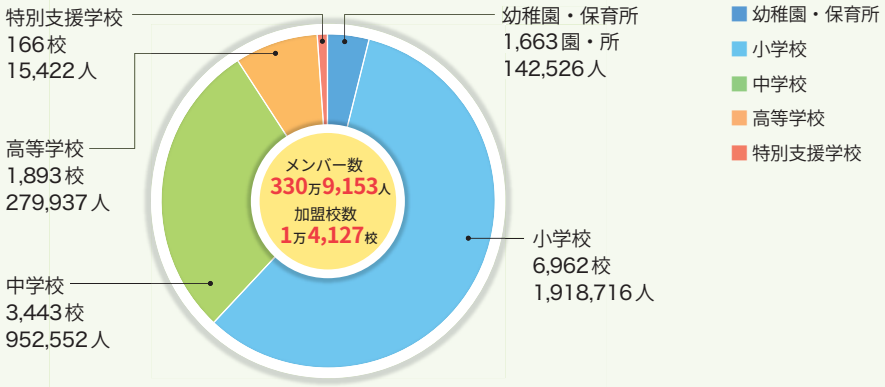
青少年赤十字の活動は、子どもたちの思考力・判断力・表現力を養うとともに、コミュニケーション能力や言語活動の充実を期待できます。

赤十字には、人間の命と健康、尊厳を守るために世界中で活動する中で得た経験やネットワークなどがあります。赤十字そのものを「教材」として、存分にご活用ください。

青少年赤十字 加盟校数・メンバー数（平成29年度）

加盟校数 **1万4,127校**　　メンバー数 **330万9,153人**

加盟校数・メンバー数ともに2018年3月現在

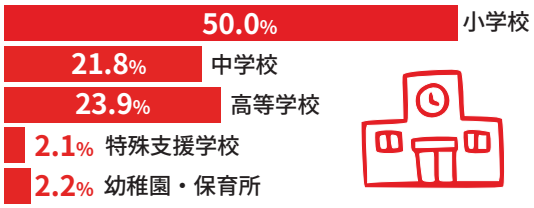


※この10年で約73万人増加しています。

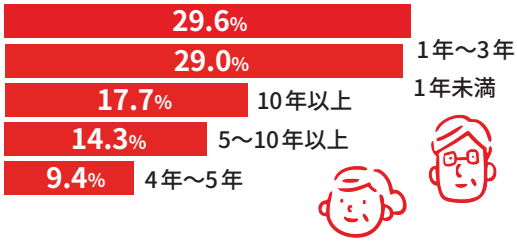
青少年赤十字活動状況のアンケート結果報告

今回アンケートにご協力くださったのは、合計で**524名**でした。皆様、ご協力ありがとうございました！

Q1 校種の内訳



Q2 回答くださった方の青少年赤十字指導歴



Q3 過去3年以内に学校内でJRCを意識した活動を行ったことがある

行った **84.5%**　行っていない **15.5%**

■どのような場面

その中でも**7割**が「学校内の委員会活動や部活動、その他学校行事」の中でJRCを意識した活動をしてくださっています。

■JRC活動に関わる生徒への良い影響　トップ3は…??

1. ボランティア活動への興味・関心が高まった　**65.5%**
2. 他者への理解や思いやりの心が育ってきた　**55.9%**
3. 生命と健康を大切にできるようになってきた　**33.4%**

赤十字活動に関わる

青少年赤十字メンバー 青少年赤十字ユースの声 赤十字ユースボランティア

全国スタディー・センターを終えて

埼玉県立岩槻高等学校　1年

加藤（かとう） 緩凪（かんな） さん

私は、2018年3月22日から26日の5日間、第57回青少年赤十字スタディー・センターに参加しました。今回のテーマは「自分の知らない自分を知る」。開会式で「この5日間、自分の演じたい人を演じなさい」という先生のアドバイスを受け、私は“積極的な人”を演じようと決めいろいろな人に話しかけていくと、意外にもすぐに打ち解けることができました。

2日目の防災教育講義では、北九州豪雨で被害を受けた大分県の先生のお話しから、当時の状況を元に自分たち、地域、行政ができることをメンバーで話し合い、模造紙にまとめました。この時から自然と全員で意見を出すことができるようになりました。夕食の時間は初対面同士の席で緊張しましたが、それぞれの地域の方言、学校のことなどで話が弾み、時間が足りないほどでした。

3日目の選択講座では「人道について考える」を選びました。事前課題で考えをまとめたペーパーを元に、人道とは人間の尊厳と生命を守ることである、という基本や、赤十字が掲げる7原則に結びつけて学習しました。この講座を通し、人道への深い興味と、自分の考えに偏りをもってはいけないという気持ちを持ちました。翌日の自主研修では、学んだことを生かそうと、人道のワークショップを開き、先生や仲間とたくさん意見交換し理解を深めました。

この5日間、積極的な人を演じるつもりが、自然と発言や行動ができるようになっていたことに私自身、驚きました。現在は県の協議会会長になり、活発に活動を続けています。

※スタディー・センター（本社が主催）：全国から選ばれた高校生が集い、今後各都道府県でJRC活動の中心となるリーダーの養成を図ることが目的の宿泊型研修会。

赤十字ユースとして子ども食堂の運営に参加

岡山（おかやま） 莉奈（りな） さん

赤十字ユースボランティア（富山県）
2018年6月から赤十字ボランティアとして活動中
主に、「オタヤ子ども食堂」（富山県高岡市）での運営ボランティアとして活動。
（所属：富山国際大学 子ども育成学部1年）

子ども食堂のことを知ったのは高校生の時。今通っている大学の先生と、子ども食堂のスタッフの方が子どもの貧困について話し合う福祉フォーラムに参加したことがきっかけです。その時、今の日本には6人に1人の子どもが貧困状態にあるということ、核家族化やひとり親家庭、共働きによって子どもの孤食が増えていることを知りました。

実際に子ども食堂に携わりはじめたのは、高校のJRC部の部活動として。高校生の時は食事の配膳が中心でした。子どもたちの笑顔や「ごちそうさま」の声がとても嬉しかったです。

子ども食堂は、匿名で食材を送って下さったり、地域の方が野菜を提供して下さったりと多くの優しさから成り立っています。子どもたちに温かい食事と居場所を提供するこの心温まる活動を続けたくて、大学に入ってからも赤十字を通じて参加しています。

大学生になった今では、赤十字ユースとして子どもたちへの食事作りから携わるようになりました。「安全でおいしく、栄養バランスがとれたものをおなかいっぱい食べてもらいたい」。たくさんの子どもたちの会話と笑顔に会うことができるこの活動。自分が今出来ることとして、これからも活動を続けていきたいと思っています。

大学生になってもJRCと同じ赤十字のユースボランティアとして活動することができます。
詳しくは各都道府県支部へ

～青少年赤十字を卒業したら赤十字ユースボランティアにご協力ください～

指導情報2019のアンケートにご協力ください！
https://questant.jp/q/YP6PHTTD

このURLまたはQRコードからアンケートページに
アクセスできますので、ぜひご協力ください。

2019年8月31日までにご回答をお願いします。

Junior Red Cross Information 2018

青少年赤十字指導情報　No.167

日本赤十字社　東京都港区芝大門1丁目1番3号
TEL. 03-3437-7083　FAX. 03-3432-5507　http://www.jrc.or.jp/